

《眼科臨床エキスパート》 All About 原発閉塞隅角緑内障

吉村長久, 後藤 浩, 谷原秀信, 天野史郎 シリーズ編集
澤口昭一, 谷原秀信 編

本シリーズは、その道のエキスパートたちが自らの経験、哲学とエビデンスに基づいた「新しいスタンダード」を解説、明日からの診療に役立つことを目標としている。本書はまさに 300 ページを超える大冊で、原発閉塞隅角緑内障（PACG）だけで、こんなに充実した内容のテキストブックは国際的に見ても比類がなく、基礎から臨床まで、正にバイブル的存在といえる。この方面のリーダー、澤口昭一・谷原秀信両教授による編集で、計 33 名のエキスパートが執筆している。分担執筆書はまとまりに欠ける傾向がみられるが、本書は一人の著者が PACG のために苦心し、研究し、学問し、診療してきた大量の経験をつぶさに書き上げたかのように編集され、熱気や息吹が感じられ、全編がそのような魅力で溢れている。またこと細かに問題となる項目を挙げ、アカデミックな立場から、つぶさに、これに答えるような編集は、謎を解くみたいに面白い。読みながら知識が豊富になること請け合いで、教わるところが多い。

澤口教授の総説の要点を押さえながらの語り口が面白い。新潟で眼科医として初めて PACG に接し、後日 PACG の頻度の高い沖縄に渡り、幾多の困難と研鑽と疫学調査の末に合理的で最高といえる診療レベルに至った経過が物語風にまとめられている。それはまた PACG 学および眼科学の進歩の歴史でもあり、興味深い。本書はこの総説を入れて全体が 5 つの章からなり、疫学と基礎、診断、治療、白内障手術という具合に、基礎から始まり、最終的な診療に至るまで、順序よく解説されている。PACG に接することが少ない地域でも、ひとたび急性発作が起こったら予後がひどいことを知悉している眼科医にとって、ポイントとなるいくつかのリスクファクター、予防法、検査法、危険管理法、治療の要点、手術法の選択、術後管理等、平素わきまえていなければならないことが解説され、それぞれの項目について明快ながら、あたかも医局で高度の知識と豊かな経験を持つ先輩から、直接こと細かに

に教えを受けているような記述がなされている。例えば、レーザー虹彩切開術は通常 2—3 ページ解説されているだけであるが、本書ではほぼ 10 ページを費やして、適応、手技、成績、合併症と対策など、15 の小項目に分けて解説されている。

以上でわかるように、本書はわが国には学識、経験ともに豊かに円熟したエキスパートたちが揃っていることの証しでもあり、それらによる円熟の記述であるところが特色でもある。また、通奏低音のごとく PACG に寄り添って病態と診療を複雑にしているプラトー虹彩の病態生理が必ずしも明らかではなく、究極的には水晶体再建術という選択になるようであるが、より合理的で簡潔な対策を望みたいところだ。なお、PACG の分類については、周知のごとく、国際的な IS-GEO 分類、AIGS 分類に歩調を合わせる必要から、新分類が緑内障診療ガイドライン第 3 版から採用されている。これはデータの国際的整合性には不可欠であり、多分 medicolegal 的（医療に関する法医学）な要望も盛り込まれているためであろう。

要するに本書は現在望み得る最高のテキストであり、常時座右に置いて参考にしていただければ、本書の目的とする All About がオールマイティになること請け合いです。

もし本書にさらに望むことがあるとすれば、脈絡膜の動態を含む急性発作発生機構のダイナミックな解明や遺伝子の問題、プラトー虹彩の病態生理、脳の視覚中枢障害の実態などであろうか。多くのエキスパートを抱えるわが国の閉塞隅角研究グループによる解明に期待したい。

新潟大名教授・眼科学 岩田和雄

B5・頁 320 2014 年

定価：本体 15,000 円＋税

[ISBN978-4-260-01959-0] 医学書院刊